

特攻隊の真意

く武士道を伝えるく

はじめに 証拠はある

とある理由から日本の政府も、教育も、マスコミも、何から何まで国民に「大切な真実」を伝えていません。そのためには実は日本国民の多くが、「情報封鎖」されている状態にあります。

ですからおそらく本小冊子を読まれて、秘されてきた情報に初めて触れる方は、「そんなバカな！」という言葉を連発されることでしょう。そのためにできれば、元ウクライナ大使で現在は作家活動や講演をされている馬淵睦夫氏の『知ってはいけない現代史の正体』、『世界を操るグローバリズムの洗脳を解く』を読んで頂いてから、本小冊子に出会って頂きたかったものです。あるいは馬淵氏が『新しい歴史教科書をつくる会』の理事を務められている河添恵子さんと共著で出版された『米中新冷戦の正体』もかなりオススメです。もしくは近現代史研究家でジャーナリストの水間政憲氏の『ひと目でわかる「GHQ」の日本人洗脳計画』の真実も超オススメです。何が言いたいのかと言いますと、本小冊子で私がこれから私が述べるような話は、けっして私1人が創り上げた空理空論の絵空事でもなければ、単なる都市伝説でもなんでもなく、近頃は「権威」を持たれた方々も、歴史的な証拠に基づいて述べているということです。

すなわちそうした方々が述べている真実の話を、私がもう一段、深く切り込んで、そして「武士道」という別の角度から話しているのが、本小冊子『特攻隊の真意〜武士道を伝える』であります。

率直に言つて、「evidence^証はある、あとは秘された真実を広めるだけである」と、まず私はそう言いたいわけですから。なぜなら私たち日本国民は情報封鎖されて、真実を知らされずに生きてきたからです。

そしてそれが私たちの暮らしを圧迫しているのです。たとえば日本の政府は、税収は約50兆円、借金は約50兆円で、約100兆円の予算を組んでいます。これを「一般会計」と言います。しかしその背後には「特別会計」があり、日本の純粋な税金は、本当は約250兆円です。

「特別会計」こそ日本の本物の税金であり、このお金については経済学者も、政治家も知らず、ましてやかつての宮澤喜一財務大臣すらも把握しきれておりませんでした。そして日本政府は、この「特別会計」をまったく議論せずに、「一般会計」だけ議論して、1%につき2兆円の税収増を見込んで消費税を上げるのです。

これではまさに「税金詐欺」です。

民主党の石井紘基こうきという政治家は、国会議員が持つ「国政調査権」という憲法で認められた権限を使って、この日本の本当の税金「特別会計」を暴き、このお金がどこに消えているのか、それを国会で暴露しようとした。

するとその3日前の2002年10月25日に、彼は殺されてしまいました。

彼は亡くなる直前、周囲の人々に「これで日本はひっくり返る」と、話していたそうです。

石井氏を殺したのは、通名「伊藤白水」、本名は尹白水いんはくすいという在日朝鮮人の暴力団員のエセ右翼です。刑務所送りとなった尹は、2010年10月に放送されたテレビ朝日の報道番組『ドキュメンタリー宣言・石井紘基議員殺害事件の真相』の中で、「最初に3000万円、次に1500万円もらって、殺害を頼まれた」と明確に答えています。

尹白水はヒットマン殺し屋だったわけですが、しかし彼に殺害を依頼した人物は、今も謎のままで、罪を問われていません。

元『フオーブス』の記者で、フリージャーナリストのベンジャミン・フルフォード氏は、石井元議員の秘書や家族、そして石井元議員を殺害した尹白水いんはくすいにも取材して、石井元議員が国会で何を暴こうとしていたのか、それを調べました。そして私はベンジャミンにインタビュー取材しました。ベンジャミンは言います。

「結局、特別会計は海外に消えている」

日本の本当の税金が海外に消えている、それが日本の悲しき惨状です。

本小冊子は『幸福実現党』が勝利していくために書いたものですが、世の人々のみならず、すでに党員になられている方にも読んで頂きたいと思います。なぜなら日本に行われてきた「侵略の歴史」を知らずして、日本に夜明けはないからです。

もう一度言います。秘されてきた情報に初めて触れる方は、「そんなバカな!」と連呼されるでしょうけれども、証拠evidenceはあります。あとは秘された真実を広めるだけです。

真の強さとは何か？

日本は1945年に、米国との戦争に敗れました。そして1951年に「サンフランシスコ講和条約」が結ばれて、ようやく日本からGHQ占領軍が引き上げていく頃、十代のとある一人の少年は、有名進学校の麻布中学に入学したものの学校に馴染めず、渋谷で喧嘩を繰り返す、そんな荒んだ毎日を通していたそうです。

そんなある時、彼より十歳ほど年上のある人物が現れて、彼にこう言ったそうです。

「坊や、そんなつまらない喧嘩ばかりしていても、つまらないだろ？ どうだい、男を売る稼業についてみないか？」

「男を売る稼業」、この不思議な言葉に心惹かれた少年は、そのまま任侠道の道に進んだそうです。

その十代の少年の名を「安部譲二」と言い、彼は後に有名な作家となり、そして彼を任侠道の道に誘った人物の名を「安藤昇」と言い、今も伝説ともなっている安藤組の組長です。

さて、さらにそれから遡ること数十年前、1920年のインドにおいて、アマラとカマラという2人の少女が見つかりました。彼女たちはオオカミに拾われ、育てられたがために、5、6歳で人間に発見された時、なんと話すことも、二足歩行もできずに遠吠えをし、暗闇でも四足で走り、共に幼いうちに亡くなってしまうました。

彼女たちと同様に1990年代の日本において、わたくし与國秀行も狼のごとく生きておりました。しかしアマラとカマラが野性のジャングルにおいて、狼のごとく生きていたのに対して、私は都会のサバンナにおいて、

「強さの意味」をはき違え、正義を見失い、狼のごとく生きていたのです。

そんな私は親しい人から、「このままでは畳の上では死ねない」と言われておりました。「畳の上では死ねない」、それは誰かに殺されて死ぬか、あるいは刑務所の中で人生を終えるか、そんなことを意味しています。

私は、「喧嘩に勝つことが真の強さであり、それが男を張ることであり、男を売ることである」と思い込むことで、街で暴れまわり、完全に「真の強さ」とは何かを、見失っていたのです。

実際に私のかつての悪友時代の仲間は、2008年3月、西新宿にて抗争の末に命を落としました。

私はその友人の葬儀の際、復讐を考える友人たちに向かつて、かたぎ氣質の道に進むように訴えかけました。私自身、私の言葉が友人たちの心に届かないことなど、十分に分かっていました。しかしこれから起こりうる悲劇が、私にも十分に予想できたがために、どうしても私は、かつての友人たちに「かたぎ氣質になろう」と、訴えかけざるを得

なかったのです。

しかしそれから起こる悲劇は、私の予想を遥かに上回っていました。なぜならそれから約四年後の2012年9月、六本木にて、かつての悪友たちが、命を奪われた仲間の復讐のために、一人の男性の命を奪ってしまうのですが、こともあるうに「人違い」であつたのです。つまり悲しきことに被害者男性は、「人違い」で、喧嘩の抗争に巻き込まれて命を奪われてしまったわけです。

今も任侠の世界では抗争が続いておりますが、果たしてこれらの問題は一体なんでしょうか？

戦後七十数年、数多の任侠映画が撮影されて、そして大衆から人気を博してきましたが、しかし「真の強さ」とは果たして何なのでしょう？ いや、「真の強さ」を教えてくれるものとは、果たして何なのでしょう？

金品を受け取らず敵に塩を送る

「『真の強さ』とは何か？」ということを考える時、「日本は変わってしまった」ということが分かります。

たとえば現職の警察官で、初めて「裏金問題」を内部告発された方に、仙波敏郎さんという方がいらつしやいます。彼はこう断言します。

「日本の通常の業務で犯罪を行っているのは、ヤクザと警察である」

仙波氏によれば、彼が2004年に告発する以前は、年間400億円、現在は年間200億円、これらの裏金をねん出するために、老若男女の全警察官が、膨大な偽領収書の作成に駆り出されているそうです。領収書の平均金額を5000円とすると、偽領収書の数に200億円で400万枚、400億円だと800万枚にもなるそうです。

仙波さんの証言や書籍によれば、そうした偽の領収書によって作り出された裏金は、3月の人事異動の時に、キャッシュで持ち出されるそうです。そのために警察の幹部クラスになると、自分名義ではない家を持っているそうです。もちろん裏金と言っても元は税金です。

そして裏金造りに貢献する警察官は、昇進試験の回答を事前に教えてもらい、楽々と出世することができて、仙波さんのように裏金造りを頑なに拒否する警察官はほぼ皆無で、しかもそうした警察官は、いくら昇進試験を

受けても出世できず、ただ人事異動を繰り返させられるそうです。その証拠に仙波さんは、二十四歳で巡査部長になられて、そして裏金造りを拒否されて以来、定年までただの一度も出世せずに、人事異動を繰り返されております。

ページの都合上、詳しく説明できませんが、実のところ今の日本は、政治家、官僚、役人、最高裁から検察庁、そして警察まで、どこもかしこも「カネ、カネ、カネ」と、お金ばかり追い掛け回している惨状です。

しかしかつては違っていました。先の大戦に敗れて以来、日本は大切なものを失うことで、大きく変わってしまったのです。日本の人々の心が大きく変わってしまったのです。

たとえばトロイア遺跡の発見で有名なシュリーマンが日本を訪れた時、彼は税関の荷物検査の際、役人に幾らかのチップを差し出しました。なぜなら当時の外国の役人たちは、チップをもらえば簡単な荷物検査で済ませ、チップを出さないとチップを出すまで荷物検査を長引かせる、なんてことが当たり前に行われていたからだそうです。そのためにシュリーマンは、日本の役人にも同じくチップを出したわけです。

すると当時の日本の役人は、きつぱりという言い切ったそうです。

「日本男児たるもの心づけにつられて、義務を蔑ろにすることは尊厳にもとる」

しかしシュリーマンは、役人から言いがかりをつけられるどころか、通常の検査だけで満足してもらったそうです。そしてシュリーマンはこう述べました。

「日本人は大変好意的で親切であり、また彼らの最大の侮辱は、たとえ感謝の気持ちからでも現金を贈ることである」

今の日本は政治家から官僚、警察官まで、どこもかしこも「カネ、カネ、カネ」ですが、しかしこのように日本にはかつて、「むやみに現金を受け取ることを恥とする心」がたしかにありました。

あるいはかつての戦国乱世、武田信玄は敵対関係にあった今川家から、領内に塩を持ち込むことを封鎖されてしまいました。海の無い武田からすれば、これは死活問題でした。ある程度の貯えがあったものの、それも乏しくなると領民たちは窮地に追い込まれました。

その話を聞いた上杉謙信は、武田信玄とは熾烈な闘いを何度も繰り広げ、「越後の龍」「甲斐の虎」と呼ばれ、

戦国史上最大のライバル関係にあったにも関わらず、武田信玄に次の様な手紙を送りました。

「闘いは弓矢でするものであり、米や塩でするものにあらず。正面から闘う事ができないといって塩を差し止めるとは卑怯千万な行為。武士の恥ものぶ。我は何度でも運を天に任せて貴方と闘い、決着をつけようと思っている。宿敵とは全力で闘いたい故に、必要な分だけ塩をなんとしても送り届けましょう」

上杉謙信も武田信玄も、決して慣れ合いをしていたのではなく、生死をかけて戦をしていたのですが、しかしこの国の人々の心には、「むやみに現金を受け取ることを恥とする心」と共に、「敵に塩を贈ることを誉れとする心」がありました。それが侍でした。

敵さえ助ける

こうした「侍の心」は、明治維新が起こり、鬚をやめて、和服から洋服に代わり、近代化を果たしても決して失われることはなく、先の大戦中にも発揮されました。

たとえば第二次大戦の最中の1942年2月28日、当時の戦況はまだ日本が優位であり、ジャワ島北東部のスラバヤ沖にて、日本海軍はイギリス海軍に猛攻撃を仕掛けました。そのためにイギリスの船は炎上して海の中に沈み、400名以上のイギリス兵は、命からがら救命ボートで脱出しました。

それはまさに地獄でした。船から漏れた重油が目に入り、多くのイギリス兵は目が見えなくなっていました。漂流から二十時間以上もの長い時間が経ち、生存の限界に達していた時、そこに現れたのは日本海軍の船、雷いかづちでした。

当然、目の前に敵が現れたのですから、漂流していたイギリス兵たちは死を覚悟しました。イギリス兵の漂流者は400名、雷の乗組員は200名、武器や食料を抜きに人数だけを考えれば、イギリス兵の数は実に約二倍でした。しかし雷の工藤艦長は言いました。

「敵として人間。弱っている敵を助けずしてフェアな戦いはいできない。それが武士道」

この工藤艦長の言葉のもとに、「世紀の救助劇」が始まりました。船の甲板から海に縄梯子をおろしても、すでに衰弱し切っていたイギリス兵の大半が自力では上がれませんでした。すると工藤艦長は「一番砲だけ残し、総

員、敵溺者を救助せよ!」、「漂流者は一人も見逃すな」と、異例の命令を出しました。

侍たちは敵のイギリス兵を助けるために、次々と海の中に飛び込み、抱きかかえて、溺れているイギリス兵を船の上にあげました。漂流者たちは甲板の上にあげられ、そして戦時中においては、とても貴重であった水や食料が惜しみなく彼らに与えられたのです。こうして422名の漂流者が助かりました。

そして工藤艦長は、イギリス兵に対して流暢な英語でこう言いました。
しょうかん

「諸官は勇敢に戦われた。諸官は日本帝国海軍の名誉あるゲストである」

翌日、イギリス兵たちは日本の病院船に引き渡されました。この時、助けられたイギリス海軍のフォール氏は戦後、イギリスの外交官として活躍され、晩年の1996年に自らの人生を振り返って一冊の本にしました。そのタイトルは『マイ・ラッキー・ライフ』そして1ページ目にはこう記されています。

「私を救ってくれた日本帝国海軍の工藤俊作少佐に捧げる」

助けるために嫌われる

かつての侍たちには、金品を受け取ることを恥とし、敵に塩を送ることを美德とする心がありました。

そんな彼らだからこそ、「真の強さ」とは何かを知っていました。

たとえば白人優越主義と人種差別が今よりも酷い時代において、パラオという国は、スペインやドイツから九割の人が殺されてしまうほど、酷い植民地支配を受けていました。しかし日本はオランダ軍をパラオから追いやると、パラオから利益を吸い上げ奪うことなどせず、むしろパラオの人々を日本人のごとく「二視同仁」に愛しました。「二視同仁」とは誰も差別せず、すべての人を平等に見て、仁愛の心でもって人々に接することです。

日本の建国の精神、それは約二千七百年前、初代神武天皇が述べられた「八紘を掩おほいて宇と為なさん」という精神です。つまりこれは「全世界、全宇宙を一つの家ちがくとし、全人類を同胞にして家族兄弟である」と考える思想、精神です。この日本建国の精神は、明治期の田中智学ちがくという人物によつて、「八紘一字」という言葉でも、しばしば言い表されるようになりました。神武天皇とは、伊勢神宮に祀られている八百万の神々の最高神とされる天照大神の肉体子孫です。

建国の思想と精神に、こうした崇高なるものを持つために、本来は日本ほど他国家、他民族、他人種に対して「差別」というものを忌み嫌う国は、世界のどこにも存在しないのです。ですから日本の侍たちは、パラオからスペイン兵を追いだすと、戸籍制度や学校が無かったパラオに戸籍制度を作り、教育も行い、島民たちと仲良く歌ったのです。

しかし戦時中、米国の太平洋艦隊が再びパラオ攻略を目指しておりました。そこでパラオのペリリュー島の島民たちは集会を開きました。そして彼らは全会一致で、「大人も子どももふくめて一緒になって、日本人とともに米国相手に戦おう」ということを決めました。パラオ・ペリリュー島の人々は、代表数人で日本軍の中川州男隊長のもとに向かい、「私たちも日本軍と共に戦わせてください」と申し出ました。しかし中川隊長は、真剣に訴える彼ら一人一人をじつと見つめて、そしてしばしの沈黙の後、大声で次のように怒鳴りつけました。

「我々帝国軍人が、貴様ら土人と一緒に戦えるかっ。」

ペリリュー島の代表たちは耳を疑い、一瞬、何を言われたのか分からなかったそうです。なぜなら家畜のごとく扱って、九割のパラオ人を虐殺する白人たちとは異なり、日本人は自分たちを同じ人間として扱うばかりか、日頃から「仲間」と口にし、「対等」とまで言ってくれていたからです。しかしそれが突然、その同じ日本人から「土人」などと言われたために、彼らは驚くばかりか、帰り道には泣いたそうです。そしてこの出来事を代表者が島の人々に報告すると、パラオの人々は皆、「日本人に裏切られた」、「日本人に騙されていた」という思いで、悔しくて、悲しくて、泣き続けたそうです。

そして幾日が過ぎ、パラオのペリリュー島の人々は、日本軍が用意した船で、パラオ本島に退去させられる日を迎えました。港には誰一人として見送りはいません。パラオの人々は、自分たちの故郷である島を去らねばならない以上に、「対等」であり、「仲間」と思っていた日本人に裏切られた」という悔しさと悲しみの思いで、茫然自失で船に乗り込みました。汽笛が鳴り、船がゆっくりと岸辺を離れはじめた、次の瞬間でした。島から「オオオオ！」と雄叫びがあがったのです。なんと島に残る日本兵全員が、ジャングルの中から浜に走り出してきました。そして日本の侍たちは、パラオの人々と一緒に歌った日本の歌を歌いながら、笑顔で手を振り、彼らを見送ったのです。

その時、船上の島民たちは、ようやく理解しました。「日本人は島民を戦火に巻き込まないために、あえて『土人』という酷い言葉を使ったのだ」と。「そうまで言わなければ、自分たちは『日本人と一緒に戦う』と、引き下がらなかったのです、彼らはあえて酷いことを言ってくれたのだ」と。「他人のため、天下国家のためならば、あえて嫌われ役さえやってのけて命がけで戦う、それが真の侍なのだ」と。船の上にいる島民の全員の目から涙があふれ出しました。悲しみの今生の最後の別れでした。

1944年9月、ペリリュー島をめぐる日米の戦闘の火ぶたが切って落とされました。島に立てこもる日本兵10,500人に対して、米軍は四倍以上の48,740人、銃器、弾薬、戦車や戦艦といった武器のみならず、食料から水にいたるまで、何から何までが何倍、何十倍、何百倍の米軍に日本の侍たちは立ち向かいました。

圧倒的な戦力の差から米軍は「2、3日で陥落させられる、すぐにバーベキューにビールでも飲めるだろう」と予想をたてていました。しかし戦闘はなんと2ヶ月半も続きました。敵将ニミッツ提督は、自身の著書『太平洋海戦史』に次のように書いています。

「ペリリューの複雑極まる防備に打ち勝つには、米国の歴史の他のどんな上陸海戦にも見られない最高の損害比率を甘受しなければならなかった。(約40パーセントの損害、米海兵師団の第一連隊を全滅させた。)

すでに制空権、制海権をとっていた米軍が、死傷者あわせて1万人を超える犠牲者を出して、この島を占領したことは、今もって疑問である」

このパラオ・ペリリュー島の戦いにおいて、日本人はたった34人の生存者を残して全員玉砕しましたが、島民の死傷者はゼロです。しかも戦った米軍部隊は完全に立て直し、使い物になるのに約五年の歳月を費やしました。

仁愛を追求する

このようにかつての侍たちは、「真の強さ」とは何かを知っていました。

では、侍たちが知っていた「人間としての真の強さ」とは果たして何でしょうか？それは「自分のために戦う強さ」ではなく、「他人のために戦う強さ」です。真の侍たちは、「己の幸福のために戦うのは真の強さではなく、

他の人々の幸福のために戦ってこそ真の強さである」ということを知っていたのです。

では、「他人のために戦う強さ」とは、果たして何でしょうか？「欲望」、あるいは「野心」、もしくは「執着」というものを、「己の幸福を追求する心」と定義するとするならば、「他人の幸福を追求する心」とは、「愛」とか、「仁」とそのように定義することができるとでしょう。

パラオ・ペリリュー島の戦いにもありますように、「他人のために戦う強さ」を秘めた侍たちは「愛や仁こそ真の強さである」ということを知っていたのです。「欲望や野心に身を任せて戦うのではなく、仁愛の心でもって戦う、これが真の強さである」ということを武士たちは知っていたのです。

「真の強さ」、それは愛です。

そして侍たちは「真の強さ・仁愛の心」を、ただ知っているだけではなく、その「真の強さ・仁愛の心」を日々、追求していたのです。すなわち己の心の中にある欲望、野心、執着、これらを断ち切らんと自らの心を、日々、静かに見つめると共に、愛、仁といったこれらの想いを日々、大きくせんと精神修養に励んでいた、それがかつての侍だったのです。すなわち真の侍とは、日々、肉体的にも、精神的にも自らを鍛錬をして、「真の強さ・仁愛」を追求し続ける者たちなわけです。

命を惜しまない

では、「真の強さ」を追求するとは、果たしていかなることなのでしょう？

たとえば幕末の英雄、西郷隆盛はこう述べたそうです。

「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。

この始末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり」

「始末の困る者」、それはお金とか、地位とか、名誉とか、そんなものに対する欲望、野心、執着を断ち切らんとし、しかも自己保身を考えないばかりか、時には命さえ投げ出せる「真の侍」のことです。

金銭や権力や地位や名誉を求める欲深い者というのは、簡単に誰かに利用されてしまいますし、人間としても信用もできません。ですから「志があつて、なおかつ無欲な者でなければ、同志として一緒に天下国家のために

戦えない」と、そのように西郷隆盛は述べられたわけです。実際に坂本龍馬は追われる身となり、金銭もろくに無くなって、西郷隆盛の嫁に「使い古しいから禪をくれないか」と頼んだことがあります。その話を聞いた西郷隆盛は、「彼は国家のために天下を奔走している人であるから、新しいのを買って差し上げなさい」と、そのように言ったそうです。

また、坂本龍馬は、よくこんなことを人に述べていたそうです。

「人は事を成すために生まれてきた。しかしこんな時代だ。志半ばで命尽きることもあるかもしれない。ならばたとえドブの中で命尽きようとも、前のめりで死んでいきたい」

このように真の侍とは命さえ惜しまない者たちなのです。

そしてその生死を顧みない思想は、侍たちのバイブル的な書物、『葉隠』に見出すことができます。『葉隠』とは、江戸時代中期の思想家、山本常頼（じょうろう）という方が、侍としての「生き様」を語り、その「生死の思想」を田代陣基という方が書物にまとめたものです。『葉隠』には、有名な言葉として次の一文があります。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」

「武士道とは死ぬことである」、これはもちろん犬死、無駄死にをすすめているわけではありません。では、「武士とは死ぬことと見つけたり」とは、果たしてどういった意味なのでしょうか？たとえば幕末の志士である高杉晋作は、師の吉田松陰に、「男子とはいかなる時に死ぬべきであるのか」と、問うたことがあり、それに対して松陰はこう答えました。

「死して不朽の見込みあらばいつでも死すべし。生きて大業の見込みあらばいつまでも生くべし」

つまり松陰という方は、自分の教え子たちに、「侍というものは、いつ死ぬかを問題にするのではなく、公のためにもいつでも死ぬ覚悟を決めて、大業を為す努力を全力で行って生きろ」と、そう教えたわけです。

どうせ、いつかは閉じられる人生、たとえ長く生きても三万日程度、死から逃げられる者は一人もいなく、誰もがいつか必ず死を迎え、必ずあの世に還っていきます。そうした儚い人生の中で、真の武士たちは、「生への執着を断ち切り、死の恐怖を克服し、潔く己を滅する」ということを何より重んじたのです。

このように真の侍とは皆、「始末に困る者たち」でした。

古くから受け継がれる特攻

そして命さえ惜しまない侍精神は、時に特攻攻撃として発揮されることもありました。

実は第二次大戦中、当時の米国、英国、ロシア、中国には「日本を分割統治する」という案までありました。「日本分割統治計画」です。つまり日本人もハワイの人々のように、国を完全に失ってしまう可能性が確かにあったのです。先の大戦において日本が滅びる可能性が、たしかにあったわけです。

しかしもしも日本を分割統治すれば、命知らずの侍たちによる反乱が日本各地で起こり続けて、甚大な被害が出続けて、結果的には「日本統治は不可能である」と考えられて、「日本分割統治案」は無くなったと云われています。命を惜しまない侍たちによって、日本は滅びずにすんだわけです。その最大要因こそが「神風特攻隊」であつたと云えるでしょう。

真の侍とは、「いかに死ぬか」ということに、大きなこだわりを持ちます。真の侍は「死に対する美学」さえ持ち、ゆえに彼らは人に命を取られることをよしとせず、時には切腹して自らの命を閉じました。真の武士は、名誉や官位に執着せず、食事や衣服にもこだわりませんが、「死に様」には大きなこだわりを持ったのです。

そんな彼らだからこそ、先の大戦において戦局が悪くなり、なおかつ日本消滅の危機さえ感じ取ると、彼らは「神風特攻隊」として、爆弾を積んで敵戦艦に突撃を行ったのです。つまり特攻攻撃の第一の目的は、「敵艦を叩いて退ける」ということでありましたが、第二の目的として「侍の真の強さを見せつける」ということもあったわけです。

あえて米軍は特攻攻撃の被害を小さく発表していたようですが、全体で見ると二十パーセントぐらいが、敵艦に飛行機ごと命中しており、途中の空中戦で墜とされたものもあるために、それを差し引くと特攻での命中率は五十六パーセントだったそうです。ですから米軍はそうとうな被害を受けており、実は何百隻もの戦艦が撃沈、もしくは大破させられたわけです。日本の侍の「死に様」が理解できず、米兵の中にはノイローゼになる者さえいました。

しかしこの特攻攻撃の元は、鎌倉時代や南北朝時代にまで遡ります。「侍の鏡」と誉れ高い楠木正成は、足利尊氏と対決しました。足利尊氏軍3万5千の兵に対して、楠木正成軍の兵はたったの700騎、その戦力差は実に

約50倍以上でした。誰もが、簡単に勝敗がつくと思いました。しかし楠木正成軍は50倍の軍勢に對して、鬼氣迫る勢いで16回にも及ぶ突撃を繰り返したのです。それでもやはり多勢に無勢、突撃の度に、楠木正成軍は減り続け、6時間の激闘の末、残った者はわずか73騎でした。

楠木正成は生き残った73名の部下と共に、死出の念仏を唱えて火を放ち、自刃しました。享年42歳です。この時の彼の言葉が、世に有名な「七生報国」です。つまり、「七度、生まれ変わろうとも、自分は天下国家に報いる」ということでした。こうした楠木正成の侍精神、特攻精神は、その後、日本中に根付いていき、明治維新の志士たちにも、先の大戦にも、「楠公精神」として受け継がれました。

かつての侍たちは、「真の強さとは『生への執着』を断ち切り、『死の恐怖』を克服するものである」ということを追求していたことから、時には命さえ惜しまずに特攻を行つたのです。

侍精神を授けていたもの

そして侍たちに「真の強さ」を教えて、「真の強さ」を追求させていたもの、それが武士道でした。

明治から大正、昭和にかけて世界的に活躍された日本人に、新渡戸稲造という方がおられます。

彼は外国の教授から、「それでは貴方の国には宗教教育はないと、そうおっしゃるのですか？」と、そのように質問されて、「ありません」と、きつぱりと答えたそうです。するとその外国の教授は、「宗教教育無しで、どうして人々に道徳を授けることができるのですか？日本人は何を基準に物事の善悪を学んでいるのですか？」と、そう驚き、少し怒り気味に言つたそうです。なぜなら外国では、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教などが、人間に善悪を教えて、道徳を与えてきたからです。

外国の方にそう問われて、それから新渡戸氏は、「自分たち日本人はどのようにして道徳を得て、何に基づいて物事の善悪を学んでいるのか」、それを考えてみました。こうして彼はやがて、「日本人には武士道教育がある」ということに気が付きました。そして彼は、「日本人を外国の方々に理解してもらおう」と、『武士道』日本の魂』という書物を世に著しました。侍たちに、むやみに金品を受け取ることを恥とし、敵に塩を送ることを美德と教えると共に、「真の強さ」を教えて、「真の強さ」を追求させていたもの、それは武士道だったのです。

では、武士道とは、いかなるものなのでしょうか？江戸幕末の山岡鉄舟という侍にして、思想家は次のように述べています。

「武士道とは神道にあらず、儒道にあらず、仏道にあらず、武士道とは神儒仏、三道融和の道念」

「道念」とは、「道を求めて学ぼうとする強い想い」のことであり、すなわち「向上心」であり、もしくは「求道の心」という意味です。つまり山岡鉄舟という侍は、「侍たちに真の強さを教えると共に、真の強さを追求させて、侍精神を授けていた武士道教育とは、日本独自の宗教である神道そのものでもなければ、中国発祥の儒教という宗教でもなければ、あるいはインドやネパールで興った仏教でもない。真の武士道、それはこれら三つの神道、儒教、仏教が融和したものであり、これらを学ばんとする求道心や向上心の先にあるもの、それが真の武士道である」と、そう述べたわけです。

このように武士道とは、神道、儒教、仏教、これらの三つの宗教が、この和を尊む国において融和して、築き上げられてきたものであり、この武士道こそが、日本人の侍精神を開花させてきました。

任侠道で有名な清水次郎長しみずのじろちやうですが、彼もこの山岡鉄舟に心酔することで、武士道に触れ、晩年は気質となり、慈善事業を行い、武士道を歩まれました。しかし敗戦後の日本人は、武士道を失い、侍精神も失い、そして「真の強さ」を忘れてしまいました。なぜか戦後の日本では任侠映画ばかりが創られて、武士道よりも任侠道が流行してきたのです。

しかしそれは偶然ではありません。なぜなら戦前、戦中の日本人が、あまりにも、あまりにも誇り高く、そして死を恐れることもなく、希望を捨てることもなく、勇敢で強く、そして優しかったために、日本人から武士道・侍精神を失わせるべく、画策した者たちが実はいたからです。武士道は任侠道よりも崇高なものです。しかし戦後の日本において、武士道が廃れて任侠道が流行ってきたのは、実は偶然ではなかったのです。

罪悪感を植え付け愛国心を奪い取る

まず戦後の日本にやってきた占領軍GHQは、日本人から「日本人としての誇り」を奪い取ることにぬかりがありませんでした。その工作を「ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム」、略称「WGIP」と云い

ます。つまり「WGIP」とは、「日本は悪い国、日本は侵略と虐殺を行った恥ずかしい国」という洗脳、そして罪悪感を、日本国民の潜在意識の奥深いところにまで徹底的に叩き込む作戦のことです。「WGIP」の一つとして戦後、日本は『東京裁判』によって裁かれました。

ギリシャ神話のテミスという女神は、目隠しをしていて、片手には公正を意味する天秤を持ち、もう一方の手には正義を意味する剣を持っています。そしてこの女神は司法の象徴ともされています。このテミスに象徴されるように、本来、「裁判」というものは、強者や弱者に関係なく、「公正な視点でもって、どこに正義があるのか？」ということを追及するものです。

しかし『東京裁判』には、女神テミスは存在せず、公正さも正義も欠片もありませんでした。なぜなら一方的に強者の戦勝国側が、自分たちは正義で、弱者となった敗戦国日本を悪と決めつけて、「アジア諸国を侵略したのは日本であり、南京で大虐殺したのも日本である」と、強引に歴史が塗り替えられてしまったからです。つまり『東京裁判』は「裁判」ではなく、単なる「政治」、しかも「悪徳政治」だったのです。

あまりにも有名な言葉ですが、タイのククリット・プラモート首相は言います。

「日本のお陰でアジアの諸国はすべて独立した。日本というお母さんは難産して母体をそこなったが、生まれた子どもはすくすくと育っている。今日、東南アジア諸国民がアメリカやイギリスと対等に話ができるのは一体誰のお陰であるのか。」

それは『身を殺して仁をなした』日本というお母さんがあった為である。12月8日（開戦）は我々に、この重大な思想を示してくれたお母さんが一身を賭して重大決意された日である。更に8月15日（終戦）は我々の大切なお母さんが病の床に伏した日である。我々はこの二つの日を忘れてはならない。」

また、パラオという国は大戦後、欧米諸国から独立を果たすと日の丸をモチーフに国旗を作り、しかし「日本と同じだと失礼」という意味から、あえて日の丸を左に少しずらしております。かつて日本がパラオで戸籍制度を作った際、命の恩人であり、尊敬する日本人の苗字を取って、自分の名前にしたパラオの人々さえたのです。

またインドネシアも独立宣言をする際、西暦を使用せずに、あえて日本の暦である皇紀を使用して独立宣言をしました。皇紀とは、初代神武天皇が、即位された年を元年とする日本の暦のことです。

しかも今もあの戦争当時も、民間人に対する軍事攻撃は「国際軍手法」に照らして犯罪です。そして日本はこの軍手法を守ることに徹底しますが、逆に米国側は日本に対して東京大空襲を行い、さらには広島、長崎に対する原爆の投下によって、合計約60万もの民間人を虐殺したのです。

先の大戦で、日本人は大虐殺されました。しかし日本は「南京大虐殺」など行わなかったのです。10万人しか住んでいなかった当時の南京において、30万人の民間人を虐殺することなど、物理的には不可能なことです。むしろ日本側が、その2倍にもあたる60万人が虐殺された、というのが歴史の真相なのです。

これらの、「日本が侵略や虐殺を行っていないアジア諸国の証言や証拠」、そして「むしろ東京、広島、長崎において、戦勝国こそ虐殺を行っていたという証拠」、これらこそ、いかに『東京裁判』が「裁判」などではなく、「悪徳政治」であったかを示しております。すなわち『東京裁判』とは、戦争に敗れて弱者となった敗戦国と強者である戦勝国の間で、「正義」と「悪」を入れ替えるために行われた政治であり、単なる詐欺裁判だったのです。

こうした『東京裁判』を行うことで、日本人から「日本人としての誇り」を奪い取ると同時に、日本人の深層心理的に罪悪感を植え込んで、日本国民を日本嫌いにさせる作戦、それが「W G I P」なわけです。

「そんな狡猾な作戦が本当に行われたなんて信じられない」と、そう思われる方もいるかもしれませんが、実は「W G I P」に関する文書も見つかっております。今では「W G I P」は、櫻井よしこ、小林よしのり、ケン・ギルバードといった保守系の言論人や歴史学者、さらには『産経新聞』などでは、公然たる事実となりつつあります。それに何よりも正義なき偽の裁判である『東京裁判』が行われたこと、そして『偽の歴史教育』が今もなお行われていること、さらには『偽のマスコミ報道』が今も続いていること、これらこそが、「W G I P」が現実である確かなる物的証拠です。今現在、日本人の愛国心が乏しいのは、この「W G I P」に原因があります。

下げられた宗教性

次に占領軍GHQは、「神道指令」を発令して、神道を日本の公の場から取り除いて、日本人から神々や霊を信じる心、信仰心を奪い取りました。日本という国は、神道を中心軸に据えて建国され、歴史を歩んできましたが、GHQは神道を公の場から外すことで、日本人の信仰心を奪い取ったわけです。

さらにGHQは、「修身」という儒教の教育も奪いました。「修身」とは、戦前に行われていた公教育であり、「国家の権力者であろうと、一般庶民であろうとも、一人一人が自らの言葉を正し、行動を正して、みずから自身を修めていく、これを行わずして世の中が平和的に治まることはない」と、教えていた儒教教育のことです。

GHQはこの儒教教育を取り除くことで、日本の教育を、知育、体育、食育といった肉体や頭脳ばかり育むだけのものにして、「精神を鍛えて徳を授ける」という「徳育」を取り除いたのです。

しかも戦前の日本の子どもたちは、神社やお寺で遊んで、神主さんやお坊さんなどに触れて、ごく自然に精神修養を行っていました。しかしGHQは、わざわざ日本中に公民館を建てて、そこに日本の子どもたちを集めることで、子どもたちを神社仏閣から遠ざけることを画策して、そしてこれを見事に成功させてきました。

さらにGHQは「農地改革」を行って、お坊さんたちの生活基盤だった土地を取り上げて貧しくさせて、宗教家たちをお金儲けに走らせたのです。なぜなら宗教家が金儲けに専念すればするほど、自然と彼らの精神は落ちて、そして宗教家の精神性が落ちれば、自ずと日本全体の精神性も下がるからです。

こうして日本の仏教は、ますます葬式仏教、観光仏教へと墮落していきました。するといつしか仏教徒たちが、「生とは何か、死とは何か」という仏教の根本的な問に、答えられなくなってしまったのです。「不惜身命」、これは「身も命も惜しまない」という仏教の言葉であり、武士道を構成している神儒仏の三つの宗教の中でも、実は特に仏教こそが、侍たちに「生への執着」を断ち切らせて、「死の恐怖」を克服させていたのです。しかし仏教が興って約二千五百年という長い月日と、さらにはGHQによる宗教性を下げる様々な画策によって、仏教徒たちが仏陀の教えが分からなくなってしまったわけです。

神道、儒教、仏教が衰退させられることで武士道は解体されていったわけですが、しかし「仏弟子たちが、どれが仏陀の本当の教えか分からなくなり、生命観を説けなくなった」ということが、特に武士道の解体にとって大打撃となったと言えるでしょう。

手が加えられた暦と漢字

「神儒仏という宗教が衰退させられて、これによって武士道が解体させられた」と知らされても、「そんな話は

信じられない」と驚くかもしれません。しかしその物的証拠があります。それは「暦」と「漢字」です。武士道を解体して、日本人から侍精神を奪わんとした者たちは、実は日本の暦と漢字にも狙いを定めたのです。

たとえばかつて4月3日は、『神武天皇祭』が行われておりましたが、これは廃止されました。他にも『春季皇霊祭』は「春分の日」、『秋季皇霊祭』は「秋分の日」、11月23日の『かんなめさ新嘗祭』は「勤労感謝の日」と、それぞれ勝手に呼び名を変えられてしまったのです。10月17日の『しんがく神嘗祭』も廃止されて、スポーツを流行らせる流れを作られて、10月10日は「体育の日」と制定されました。2月11日の『きげんせつ紀元節』は、今から約2700年前に神武天皇が日本を建国された日であり、日本における始まりの記念日ですが、しかしこの祝日も勝手に「建国記念日」などと名前を変えられてしまい、今では本当の意味を知る日本人はあまりいません。

漢字や言葉もそうです。たとえば戦前まで日本では、「わたし」という言葉を、「多くの志を和する己」という意味から、「和多志」と表記していました。すなわち、かつてこの和の国においては、「わたし」という言葉そのものに、個人主義的な意味合いではなく、むしろ調和的な意味合いこそが含まれていたわけです。

「あい」という言葉も同様です。かつては「天意てんい」と書いて「あい」と読みました。すでに本冊子の中で、「他の人々の幸福を願う心が愛であり、かつての侍にとつての真の強さとは愛であった」と述べましたが、日本において愛とは、まさに天の意思であったのです。

もしも戦前の日本のように、普段から使用している暦や漢字の中に、「神」や「霊」といった言葉が入り、「暦」や「漢字」の宗教性と精神性が高ければ、今の日本のように、これほどまでに無神論・唯物論が流行することもなかったでしょうが、あえてGHQは「暦」と「漢字」から宗教性と精神性を抜き取ったのです。GHQは、「日本人は漢字などという難解なものを学んでいるから、他の学びが遅れてしまい、侵略や虐殺などという愚かなことを行ったのだ」などと、勝手な理由をつけて日本の暦と漢字を変えてしまったのです。

こうしてGHQは、日本人から信仰心を奪い取り、日本人の精神性・宗教性を、引き下げることに成功してきました。こうした「暦」と「漢字」から、宗教性と精神性を抜き取られたことが、武士道が解体させられた物的証拠と云えるのではないのでしょうか。

破壊された日本の文明

しかも米国GHQは、「軍部」、「財閥」、「地主制度」などを解体する一方で、置き土産として「日教組」という、左翼・共産主義の教育者の労働団体はあえて残しました。「日教組」とは東京裁判の偽の歴史観を持つ、反日的な教職員の組合のことです。

「日教組」が創設されたのは1947年であり、この頃はまだまだGHQによる占領期間の最中です。そして占領期間中の日本は、電話は盗聴され、手紙は開封されて検閲され、国旗を掲げることも国歌を唄うことも禁止され、多くの人々が「公職追放」によって職を失う、そんな自由無き窮屈な時代でした。しかしそうした時代の中であっても、GHQはあえて「日教組」の設立を容認したのです。GHQは「日教組」をあえて認めることで、日本の教育の中に、自虐的で唯物論的な左翼教育をわざと持ち込ませて、自分たちが行っている「WGIP」に拍車をかけたわけですから。こうして日本の教育は、「単なる偏差値教育」、「知識教育」、「就職のための教育」へと落ちぶれていきました。

「WGIP」を行って日本人に罪悪感を植え付け、そして神儒仏を衰退させ、日教組を盛んにする、さらに漢字や暦にも手を加える、こうしてGHQは、日本文明を破壊することで、日本人から愛国心と信仰心という二つの心を奪っていったわけですから。実は歴史的に見て日本には、日本固有の文明があることが分かっているのですが、その日本文明がことごとく破壊されたのです。その結果、日本人の心は時代と共に変えられてしまい、政治家や官僚、警察官まで「カネ、カネ、カネ」とお金を追いかける事態となってしまうっているわけです。

政治から切り離された関心

しかも戦後約七十年以上にわたって、今現在も「3S政策」が行われていると云われています。

「3S政策」とは、「Screen（スクリーン＝映画やドラマ鑑賞）」、「Sport（スポーツ＝スポーツ観戦）」、「Sex（セックス＝性産業）」、これらの「3つのS」を用いることで、大衆の関心を政治には向けさせず、日本を根本から骨抜きにしてしまう「日本愚民政策」のことです。「昭和政治のフィクサー」と名高く、儒教陽明学者であり、哲学者兼思想家である安岡正篤^{まさひろ}という方が、GHQのガーディナー参事官から、直接、この「3S政策」の話を

聞いたそうです。

本冊子をここまで読まれてきた方であっても、「愚民政策なんて、流石にそんな話は信じられない」と、そう思うかもしれません。しかしまず安岡正篤ほどの著名な人物が、こんなウソをつく理由がありません。また『日本テレビ』の初代オーナーである正力松太郎氏が、CIAのエージェントであったことは、すでに米国の公式文書で明らかにされており、否定することのできない歴史的事実です。

『日本テレビ』と云えば、戦後の日本の野球界をけん引してきた読売グループの一つです。そして実際に正力松太郎氏は「PODAM (ポダム)」、日テレは「PODALTION (ポダルトン)」、読売新聞社「POBULK (ポバルク)」、読売巨人軍は「POHIKE (ポハイク)」と、それぞれにCIAのコードネームがあることが分かっています。

ちなみに朝日新聞の主筆である緒方竹虎氏にも、「POCAPON (ポカポン)」というコードがあることが分かっています。『反日マスコミ』と云われる朝日新聞の主筆にもCIAのコードネームがある、こうしたことなどからも、日本人の潜在意識に罪悪感を叩き込む「WGIP」という作戦が、『東京裁判』と『日教組』と共に、「日本のマスコミ」も使われて、行われてきたことが分かります。

そして現実には日本の大半の人々、特に若者たちは、「3S」には関心が高い一方で、「政治」には関心が薄くなっています。今の日本の若者たちが、スポーツや映画やドラマには熱狂しても、選挙に熱狂するようなことは今現在、到底、考えられません。たとえば2019年の参議院選挙の投票率は約48%ですから、実に約52%の国民が選挙に行っていないわけです。こうした選挙に行かない人々こそが、「日本国民に3S政策が行われてきた」ということを証明する証人と云えるのではないのでしょうか。

しかもついに日本の若者の死因第一は、自殺になってしまいました。日本の年間の変死者数は約15万人です。今、遺書が無く「自殺」と断定できない場合、「変死」にされています。そして「変死者の半数以上が実は自殺であった」とも云われています。若者の自殺、遺書無き変死など日本の問題は山積みです。しかし若者たちのほうが日本で長く生きていくというのに、その若者たちが政治には関心を持たず、「日本の未来とかどうでもよくね?」「政治なんかかったるいっしょ」と、いったそんな感想を抱く「矛盾した時代」です。

つまり若者の死因第一が自殺であり、若者が政治や選挙に関心を持たず「3S」にばかり関心を抱いている、

この「時代の矛盾」こそが、「WGIP」と共に「3S政策」も行われてきた、その最大の証拠と言えるのではないのでしょうか？

もう一度、述べますが日本人の心は変わったのではなく、変えられてしまったのです。

行われる続ける金融詐欺

ちなみに「CIA」という名前が出てきましたが、日本人から武士道と侍精神を奪い取ったのは、けっして米国ではありません。その奥に秘された犯人、グローバリスト国際銀行家がいるのです。

第3代アメリカ大統領トーマス・ジェファソンはこう述べていました。

「銀行は軍隊よりも危険である。もしも民間銀行に通貨発行を奪われたら、我々の子孫はホームレスになるまで、銀行に利益を吸い上げられてしまうだろう」

実はアメリカも日本も、お金（通貨）を発行しているのは、『FRB』、『日本銀行』という中央銀行であって、これらの銀行は民間の銀行であり、会社です。「通貨発行権が政府ではなく民間銀行にある」、これは実は壮大な金融詐欺なのです。この壮大な金融詐欺を、実は経済学者たちも、政治家たちもまったく理解しておりません。同志社大学の元教授・山口薫さんは、「世界のトップ10に入る」と言われているカリフォルニア大学バークレー校で、ノーベル経済学者のジェラルド・ドブルーやジョージ・アサー・アカロフといった、世界に名だたる経済学者たちから、経済学を学んで来られました。まさに彼は最先端の経済学を事細かに学んできた人物です。その彼が、自身の著書『公共貨幣』という書籍の中で、次のように述べています。「現在の経済学では中央銀行については何も教わることはなく、また現在の貨幣制度というものは、我々が教えて頂いた経済学とはまったく異なり、中央銀行が『無』からお金を創り出している」と。

東大だろうが、オックスフォード大学だろうが、ケンブリッジ大学だろうが、カリフォルニア大学だろうが、世界中のどこの一流大学だろうとも、経済学の授業において、「中央銀行」と「通貨発行権」というこの大問題は、実はこれまでスルーされてきました。そして山口薫氏がこの経済のタブーについて切り込むと、彼は同志社大学を解雇されてしまったのです。

あるいは経済金融誌の『フォーブス』の元記者で、現在はフリージャーナリストとして活躍しているベンジャミン・フルフォード氏もこう述べています。

「日本やアメリカの現在の通貨制度は金融詐欺であって、『日銀』や『FRB』といった中央銀行は民間銀行であり、この民間銀行の上に君臨しているのは、日本政府でもなければ米政府でもなく、スイスのバーゼルにある『国際決済銀行・BIS』である。そして『BIS』に電話してみれば分かるけれども、この『中央銀行の中央銀行BIS』も、スイス政府や国連ともまったく関係ない民間の国際銀行である」

原価22円の紙キレを一万円札に変える力、それは「絶大な力」であり、まさに「魔法の力」です。しかしその力がアメリカも、日本も政府が持つていなく、民間会社を持つており、その上に君臨している国際銀行もまた民間会社なわけです。そしてジェファースン大統領が「通貨発行権を奪われたら子孫はホームレスになってしまう」と予言したように、アメリカには子どものホームレスさえあります。第16代大統領エイブラハム・リンカーンはこう言っていました。

「政府は、自分で政府に必要な費用をまかない、一般国民の消費に必要なすべての通貨を流通させるべきである。通貨を創造し、発行する特典は、政府のたった一つの特権であるばかりでなく、政府の最大の建設的な機会なのである。このシステムを取り入れることによって、納税者（国民）は計り知れないほどの金額の利子を節約することができる。それでこそお金が人間の主人ではなく、人間が人間らしい生活を送るために、お金が召使になってくれるのである」

しかしこの発言から一カ月後、リンカーンは「グリーンバックス」という政府支配を発行して暗殺されます。また 1963年6月4日、ジョン・F・ケネディ大統領も、アメリカの金融システムを再建しようとして、「大統領令」を発して、5ドルの政府紙幣を発行しました。するとその5ヶ月後、彼はダラスにて謎の暗殺に遭い、そして彼が発行した5ドルの政府紙幣も、すぐさま回収されてしまいました。

普通に考えてみて、なぜアメリカでは6人も大統領が、暗殺未遂および暗殺に遭っているのか？その6人の大統領の共通点は何か？それは「お金を発行する中央銀行と対決した」ということです。アメリカで初めて暗殺未遂に遭った、第7代大統領アンドリュー・ジャクソンは言いました。

「銀行は私を殺したいだろうが、私こそ銀行を殺す。お前たちは腹黒い盗人の巣窟だ。私たちはお前たちを一掃する。永遠なる神の力によって、お前たちを必ず一掃する」

政府が「通貨発行権」を持たず、国際銀行家が持っている、それはすなわち米国や日本に対して、こうしている今現在も、壮大な金融詐欺を行っている国際銀行家たちがいるわけです。先の大戦が日本の侵略戦争ではなく、日本は虐殺もしておらず、日本人こそ虐殺されているのならば、では、先の大戦は何のためにあったのでしょうか？誰かが日本を密かに侵略していても不思議ではなく、それはまさに金融詐欺であり、金融侵略であり、それを行ってきたのが国際銀行家です。

経済学者が分かっているフリして、実のところこの最も重要な点、この金融詐欺について分かっていない、それがそもそも大問題なのです。

そして悪い意味において、人知を超越している国際銀行家勢力は、自分が行ってきた金融詐欺に気づかせなくするために、武士道を解体し、「WGIP」や「3S政策」を行って、日本人の宗教性を低くしてきたのです。これは金融侵略と共に行われてきた信仰侵略だったのです。

大繁栄の時代はすぐそこ

つまり国際銀行家が、自分たちが行っている金融詐欺に気づかせず、日本国民から搾取し続けるために、GHQやCIAを使って、ウーサーゲル・イン・オーストリア・コンラッド 神儒仏を衰退させて、代わりに左翼教育を盛んにすることで、まず「武士道」を解体したわけです。そして「WGIP」によって日本人に罪悪を植え付け、日本人としての誇りを奪い、愛国心を抜き取り、それと共に「3S政策」も行うことで、スポーツやスクリーンに目を向けさせました。その結果、若者たちに、「日本の未来とかがどうでもいいっしょ?」、「政治とかがどうでもよくねっ?」という価値観が植え込まれてきたのです。その背後では、任侠映画も流行ってきました。

するといつの間にか「事なかれ主義」、「他人任せ」、「金儲け主義」、「個人主義」、「現状維持」、「自己中心」、「無関心」、「消極的」といった特徴が、日本人の中で目立つようになってしまいました。そのために大半の日本人が、自分たちに行われている金融詐欺に気づいておらず、たとえ気がついていても、行動を起こすことを恐れて何もしな

いわけです。

しかし未来はありません。なぜなら日本人が侍精神を取り戻して、その侍精神でもって金融詐欺を終わらせて、金融植民地から解放されれば、日本国民の暮らしは見違えて良くなり、お金で苦しむような人は、この日本からただの一人もいなくなるからです。山口薫元教授が、『公共貨幣』という書物の中で、難解な数式を用いて明らかにされておりますが、実のところこの金融詐欺を終わらせることができれば、日本政府の借金など雪のように消えていくのです。そしてもし政府の借金が無くなれば、国民が重税と増税で苦しむようなこともなくなります。いや、冒頭で「特別会計」という本物の税金について少し触れましたが、そもそも日本は増税する必要などまったくないのです。

日本国民が侍精神を復活させれば、日本国民の暮らしは、まったく別の次元レベルで豊かになって、「お金」の意味、「働く」という意味さえ根本から変えてしまうことができるのです。「信じられない」とそう思うかもしれませんが、その証拠に、今から百年ほど昔の1930年、経済学者のジョン・ケインズという方は、次のようなことを述べていました。

「およそ100年後には、ほとんどの経済的問題は解決されてしまい、人々の悩みは余暇をどのように使うか、ということになるだろう。『孫の世代の経済的可能性』」

このケインズの言葉からお分かりのように、一流の経済学者たちが、「民間中央銀行」と「通貨発行権」という経済金融の闇を知らなかったわけでは実はないのです。ページの都合上、詳しくは述べられませんが、特にケインズは確実に「金融詐欺のカラクリ」を知っていました。暗い時代が続いておりますが、実は大繁栄の未来はすぐそこなのです。

特攻隊の真意

では、どうしたら繁栄の未来は訪れるのでしょうか？それは「特攻隊の真意」を知ることです。

自爆攻撃である特別攻撃隊の編成、そして出撃命令を初めて発した人物を大西瀧治郎中将と云います。この大西瀧治郎中将こそ、「特攻隊の父」と呼ばれる人物です。

しかしこの大西中将は、日本海軍の中にあつた「特攻思想」に対して、「統帥とうすいの外道げどう」と称しておりました。「統帥」とは軍隊を指揮監督することであり、「外道」とはまったく道から反れているという意味です。つまり大西中将は特攻攻撃に対して大反対の立場にあつたわけです。しかしその彼が「特攻隊の父」となるわけです。『日本海軍航空史（1）用兵編』には、大西瀧治郎について次のような記述があります。

「1944年10月、大西が第一航空艦隊司令長官としてフィリピンに向かう前のことである。

大西は多田力三中将（軍需省兵器総局第二局長）に特攻構想について話した。多田が『あまり賛成しない』と述べたところ、大西は『たとえ特攻の成果が十分に挙がらなかったとしても、この戦争で若者達が国のためにこれだけのことをやったということの子孫に残すことは有意義だと思う』と話した」

また『一億人の昭和史3』には、「特攻の父」大西瀧治郎について、海軍に従軍していた毎日新聞記者の新名丈夫しんみょうたけおという方の証言もあります。

「大西は『もはや内地の生産力をあてにして、戦争をすることはできない。戦争は負けるかもしれない。しかしながら後世において、われわれの子孫が、先祖はかく戦えりという歴史を記憶するかぎりには、大和民族は断じて滅亡することはないであろう。われわれはここに全軍捨て身、敗れて悔いなき戦いを決行する』と話していた」

これらのことから何が分かるでしょうか？それは特攻攻撃の目的というものは、「第一には敵艦を叩くことであり、第二には侍の強さを見せつけて、日本分割案を退ける」ということでありましたが、それだけではなく実は「子孫に対して、先祖がいかに戦ったかを教えることで、『真の強さ』を後世の日本人に伝えて、大和民族が滅びないようにする」というさらなる大目的もあつた、ということです。

特攻攻撃という自己犠牲の精神、それは日本民族に対する、「民族的遺産」でもあつたわけですよ。

後世に生きる私たち日本人に対して、『真の強さ』を伝えるという目的も、実はあの特攻攻撃には含まれていたのです。私たちの魂を目覚めさせるためにも、特攻攻撃は行われていたのです。

今、ほとんどの日本人が、自分たちに対して国際銀行家が行っている金融詐欺に何も気づいておりません。

それは侍魂が失われたからです。それは武士魂もののふが失われたからです。それは大和魂が失われたからです。

しかしすでに述べたように、あの特攻攻撃は私たちの魂を目覚めさせるためにも、実は行われていたのです。

ならばこそ真実の歴史を直視し、特攻隊員の自己犠牲の精神に目を向けて、武士道を取り戻し、心の奥で眠っている侍魂を目覚めさせて、金融詐欺を終わらせ、大繁栄の扉を拓く以外に、私たちが成すべきことはないはずで。

武士の道を伝える

ページの都合上、詳しく述べられませんが、本当はもっと恐ろしいほどに「政治の闇」は奥深いものです。しかしわたしと与國はネット上でも、講演でも、街頭演説でも、躊躇なく、臆することもなく「政治の闇」を語っているために、よく人から「殺されないか」と心配されることがあります。しかしすでに述べましたように、わたしと与國秀行は、かつてアマラとカマラのように狼のごとく生きていました。私は街で暴れまわり、畳の上では死ねない生き方をしていたのです。そして今もなお私は、「畳の上では死ねない生き方」を続けておりますが、しかしその「死に様」はまったく異なります。

人は「死に場所」は選べません。ですから坂本竜馬の言葉にもありましたように、時代が荒れていれば、志半ばで殺されて、ドブの中で死ぬこともあるかもしれません。しかし人間は自らの「生き様」ならば変えられます。そして人は自らの「生き様」を変えていくことで、自らの「死に様」も変えていきます。天下国家に対する志を遂げんとして死んでいくか、それとも志無く死んでいくか、これによって「死に様」は大きく異なります。人は「死に場所」は選べませんが、己の「生き様」を選ぶことによって、「死に様」ならば選べるのです。

かつて私は畳の上では死ねない、そんな「生き様」をしておりましたが、しかし真の武士道に出会ったことで、「生き様」を変えて、今もなお畳の上では死ねない「生き様」を続けているわけです。

では、私が出会った武士道とは何でしょうか？

これまで述べてきたことからもお分かりのように、武士道には、必ず「自己犠牲の精神」があります。「自己犠牲性」、これはある意味において、己の成功や幸福を求める「自己実現」というものとは対極にあるものです。そして武士道は自己犠牲そのものではなく、人によっては武士道によって、自己実現を成し遂げることも間違いではないと私は思いますが、やはり武士道には必ず自己犠牲の精神があると私は思います。

ですから儒教は陽明学の神髄「殺身成仁」、すなわち「己の身を殺してでも仁を成す」という心構え、この自己犠牲とも言える心構えが無ければ、本当の武士道とは言えないでしょう。そして人間が「殺身成仁」を真に成し遂げていくためには、仏教の「不惜身命」、すなわち「身も命も惜しまない」という生命観、人生観が無ければ不可能なことです。

なぜなら仏教が伝える「転生輪廻^{てんしゅりんね}」という生まれ変わりの教え、「永遠の生命」という生命観、これらを学ぶからこそ、人は生への執着を断ち切ることができて、死の恐怖を克服していくことができるからです。むしろ何も宗教から学ぶことをせずに、「神も無く、あの世も無く、霊も無い」という無神論、唯物論を信じてしましますと、人は「死んだら終わり、死ねば何もかも消えてなくなる」という人生観になってしまいます。そうした無神論・唯物的な人生観になってしまうと、生への執着は断てず、死の恐怖に支配されることもあります。

ですから侍に成らんとするならば、仏教が説く「不惜身命」や「永遠の生命」を学び、生への執着を断ち、死の恐怖を克服することが大切であり、それができてこそ、かつての特攻隊員たちの如く、真の意味において己の身を殺してでも仁を成し遂げていくことができるわけです。すなわち仏教の教えを学ぶことによって得られていく「霊的な人生観」、すなわち「悟り」があればこそ、人は「不惜身命の人生」を生き切ることができるわけです。そして人は「不惜身命の人生」を生き切ればこそ、殺身成仁を真に成しえていくことができます、そう言えるわけです。

つまり仏教の「不惜身命」を体現して生きられなければ、儒教の「殺身成仁」を真に成し遂げることはできず、そして「殺身成仁」が真に成し遂げられなければ、そこに「自己犠牲の精神」も存在はせず、「自己犠牲の精神」が無いならば、そこに「真の武士道」は存在しないということです。

そして儒教と仏教を融和させていたものが、日本人に「和の心」を伝えてきた神道であり、この神道や仏教こそが日本人に神仏への信仰心を伝えてきました。そして人間は、神道や仏教が教えてきた信仰心があればこそ、霊的な人生観を獲得することができて、悟りを向上させることができます。すなわち神仏への信仰心があればこそ、人は自らが神仏の子であることを悟り、自らの無限の向上の可能性を悟り、そうして悟りの道を歩んでいくことができるわけです。まさに武士道とは神儒仏の向上の道、悟りの道です。

しかしすでに述べましたように、肝心な仏教が葬式仏教、観光仏教に墮すことで失われ、人々を悟りの道に誘うことができなくなりました。「伝統的な仏教が失われてしまった」、これが武士道にとって大打撃となったのです。

では、私はいかにして本物の武士道に出会い、悪なる人生から足を洗い、“まったく異なる生き様”を選ぶことができたのか？もしも私が、あのままの“生き様”を続けていたら、今頃は確実に、監獄の中か地獄にいたことでしょう。

しかし確かに私は、“生き様”を変えたおかげで、こうしている今も娑婆の空気を吸っております。

私が出会った武士道、それは再誕の仏陀の教えです。

もちろん現代日本人が、新しい宗教に対して、強い誤解と偏見を抱き、先入観を持っていることは、私も重々、承知しております。それにはおそらく『オウム』をはじめとする間違った新しい宗教の存在が大きいことでしょう。しかし元陸上自衛官の陸将補であられた池田整治氏は、次のように述べておられます。

「地下鉄サリン事件を起こしたオウムの背後には、実は北朝鮮がいて、その背後にはCIAがいて、CIAを操っていたのは国際権力であった」

池田氏が述べる国際権力とは、この小冊子の中で述べている国際銀行家のことです。では、「国際銀行家がオウムやサリン事件に絡んでいた」、これは果たして何を意味するのでしょうか？

国際銀行家とは悪い意味で人知を超えている勢力です。ですから信じがたいことは重々に承知ですが、緻密で狡猾な国際銀行家たちは、オウムまで使って日本国民に対して、新しい宗教に対する誤解と偏見、そして先入観を抱かせていたのです。彼らはそうまですること、日本国民の宗教性を下げること、武士道の復活をも阻んできた、ということです。

神儒仏の宗教の衰退、「WGIP」、「3S政策」、日教組の容認、公民館を設立して子どもたちを遠ざける、さらには読売巨人にまでコードネームをつけて利用するなど、これまで本小冊子では、彼らの様々な「心理作戦」について述べてきましたが、元陸上自衛隊の陸相補の池田整治氏によれば、彼ら国際銀行家はオウムさえも利用して、「新しい宗教は恐ろしい」という先入観を日本国民に植え付けることに成功したのです。

そのために多くの日本国民が「古い伝統宗教は良いが、新しい宗教はダメだ」と考えております。しかし古い伝統仏教は、教えを失いました。だからこそ新しい宗教が必要なのです。

この再誕の仏陀の教えに秘されてきた神道があります。ここに隠されてきた真の儒道があります。ここに失われた仏道以上の教えがあります。ここに真の武士道があります。

すでに述べましたように、かつての侍たちというのは、「真の強さ」を知ると共に、その「真の強さ」を追求する者たちです。そして「真の強さの追求」とは、己の欲を小さくし、自らの愛を大きくしていく精神の修行の道であり、あるいは生の執着を断ち切り、死の恐怖を克服していく精神の鍛錬の道でもあります。つまり武士道とは神儒仏の融和の道念であり、道念とは向上心、求道心のことです。

ですから真の武士道とは、今日の己に満足せずに、明日に向かって絶えず自らを作り変えて、無限の向上を目指しつつも、生きて大業の見込みあらば、いつでも生きて、死して不朽の見込みあらば、いつでも果てていく、「死ぬことと見つけたら」の道です。武士道、それはまさに自己犠牲の精神の獲得を目指しつつ、大業という自己実現を求める求道の道です。

そして無限の向上のことを、宗教の世界では「悟り」と呼ぶのです。ですから武士道とは、「肉体の鍛錬という武道の道」と、「精神の鍛錬という悟りの道」なわけです。そのために武士道とは、神仏に対する信仰心を持って、絶えず自分を作り続ける悟りの道であり、この「悟りに至る道」なくして武士道は存在しなのです。

そして仏教が失われた今、「悟りの道」、「日本を大繁栄に向かわせる道」は、『幸福実現党』にこそあります。ですからどうか共に、この武士道を行き、そしてこうしている今も私たちに行われ続けている金融詐欺を、一刻も早く終わらせてください。

「国際銀行家による金融侵略からの解放」、もし今を生きる私たちにそれができなければ、日本は中国共産党に滅ぼされることでしょう。それはこのまま日本を放置すれば、日本は確実に滅びることを意味しています。それでは日本を守ってくださった我々の先祖の恩に仇をなすことになります。だからこそ私たち日本国民一人一人が、特攻隊の真意を理解して、武士道を歩んでいかねばならないのです。

ここに武士の道があります。だから私はこの道を伝えます。

あとがき

日本は金融侵略され、信仰侵略されてきました。

これを持ち越えていけるのは『幸福実現党』だけです。

そしてこれを持ち越えていくためには、その侵略の歴史を直視する必要があります。

だから私は本小冊子を創りました。

今、日本の方々にとって必要なことは、政府、教育、マスコミが伝えることのない“大切な情報”を学ぶことです。

それが自分自身を守ります。

そして特攻隊の真意を学ぶと共に、武士道を歩んで、侍精神を鍛え上げていくことが大切です。

それが明るい未来を切り拓いていきます。

本当にお金で苦しまない、物質も精神も豊かな大繁栄の時代は、もうすぐそこです。

あとは私たち日本国民の意識の変革であり、すなわち魂の目覚めだけなのです。

日本を形作っているのは、私たち日本国民の心です。

ですから私たち日本国民の心が良く変われば、日本は良く変わり、心が悪く変われば日本は悪く変わります。

そのために一人一人の魂が目覚めて、心が良い方向で変われば、日本は確実に良く変わります。

そして日本が大繁栄の時代を迎えれば、世界そのものが救われていくのです。

ページの都合上、詳しくは述べられませんが、むしろ逆に、日本がこのまま国際銀行家から金融詐欺に遭い続

けて、そして中国共産党によって日本が滅びるようなことになれば、実は世界人類まで滅びてしまうのです。

すなわち日本人お一人一人に、日本および世界人類の未来が実はかかっている、ということなのです。

これからわたくし与國秀行は、定期的に政治、経済、歴史、そして武士道の勉強会を行っていきます。

ぜひ、そちらにご参加ください。日時は随時、『幸福応援TV CHANCE JAPAN』にて、お知らせいたします。

します。

【作者紹介】

与國秀行:1976 年 6 月 6 日生まれ、東京杉並区出身。

元不良少年として成り金の家庭で育つも、バブル崩壊と共に一家が破産。

24 歳でホームレスになり、放浪の旅で沖縄県の宮古島に辿り着く。そして宮古島の平良図書館にて『太陽の法』に出会い、人生を見つめ直し、それまでの暴力的な人生とは全く異なる人生を歩み始める。

その後、ネットを通じて、武士道、侍精神、大和魂など、「本当の強さ」について説きはじめるが、「いくら無名な人間が訴えても、誰も耳を傾けてはくれない」と考えて、格闘技の試合に出場。最初は、ディファ有明で行われた総合格闘技の試合、二度目はさいたまスーパーアリーナで行われたシュートボクシングの試合である。ルールすらろくすっぽ分からずに格闘技の試合に出場し、敗れはしたものの、こうしたことを機に、彼の訴えに耳を傾ける人が次第に増えていく。

2009 年の『幸福実現党』立党の際には、東京 12 区から出馬、落選する。

2010 年に『幸福の科学』に出家、職員になる。

その後も執筆活動をしたり、日本各地で講演活動を行って、政治の大切さ、宗教の大切さを説くと共に、侍精神や武士道を説いて回っている。

『YouTube』では、国際銀行家や中国共産党について、かなり過激なことを主張しているためなのか、それとも元々『YouTube』・『Google』が国際銀行家の持ち物だからなのか、すでに彼のアカウントは3度もBAN(アカウント停止)されている。しかしそれでも懲りずに、4度目のアカウントを2つほど立ち上げ、訴え続けている。

オススメ動画『幸福実現党の先入観を解く』

